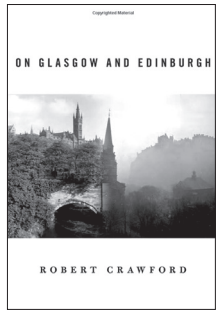
書　評



Robert Crawford, *On Glasgow and Edinburgh*
（Cambridge, Massachusetts: The Belknap Press of Harvard University, 2013）

高橋　哲雄

スコットランドは二重構造（duality）の国といわれ、中世以来ハイランドとロウランドという「南北問題」を抱えてきた。しかし、もう一つの二重性が人口の４分の３を占める中央低地にも存在していたことはそれほど知られてはいない。エディンバラとグラスゴウという、二つの、力の拮抗した、しかも異質の世界を代表する都市が、70 キロというごく近い距離の間に並び立ってきたのがそれである。多くの国に、たとえばローマとミラノ、マドリッドとバルセロナ、ブエノスアイレスとサンパウロといった「ライバル・ペア」が存在するが、スコットランドの二都ほど近接したライバルはほかにはない。

両都市の対抗が明確となるのは 1707 年のイングランドとの合邦以来のことである。貿易規制から解放されたグラスゴウは新大陸とのタバコや砂糖取引から巨利を博して「帝国第二の都市」となり、さらにそれを原資として綿・機械・造船などの工業都市にあざやかに転換し、19 世紀の一時期には「ヨーロッパ第４の都市」に上り詰める。他方、首都の座を追われたエディンバラは学芸文化に活路を見出し、人材を輩出し美しい街をつくりあげ、いまや世界遺産と国際フェスティバルの街となった。対するにグラスゴウは工業の衰退と公害の遺産に悩まされつつも、富と結びついた根づよい文化の伝統を保持し、中世以来の大聖堂と大学の伝統にも助けられて、「ヨーロッパ文化首都」に登録された。シーソーのような二都の運命の交替は対抗意識をいっそう掻き立てることになったかもしれない。

だのにこの両都市が、これまで併せ論じられることはなかった。両都の比較は好んで小話のタネにされるのではあるけれど、本格的な比較都

市文化史的な取り組みは見られないでいた。それぞれについてはすぐれた論考が少なくないにも関わらずである。R・L・スティーブンスンは *Edinburgh: A Picturesque Note*, 1878 の結びで「重い言葉として言うのだが」と前置きしつつ「私はまだグラスゴウを書いていない」と謝りに近い調子でグラスゴウ人に断りを入れている。やはりエディンバラ人である碩学 David Daiches も *Glasgow*, 1977 の序文で「深い愛情ある理解」で歩き調べたが、地元人の書いたグラスゴウほどに「情熱的な入れ込み」にはなっていないのではないかと、断っている。両都の比較は微妙な配慮を必要とするようだ。

それをあえてしたのが本書である。著者 Robert Crawford はグラスゴウ育ちの詩人教授（セント・アンドルーズ大学）である。彼も伝統を踏んで慎重。書名ではグラスゴウを、中味ではエディンバラを先にしている。また『タイムズ』のインタビューでは、エディンバラに３ページ多く割いたと悔やんでいる。これはまあ詩人の匠気の言わせたことと思いたい。

なぜそこまで拘るのか。長い序説で著者はそれをとりあげる。たしかに両都の間には長い対立や競合の歴史があるが、では両者が差異や対立を解消し一つの都に合体したら、世界は関心を持ってくれるだろうかと問い、差異や対抗があればこその魅力なのだとして、「誇り高い競争」を奨め、大切なのは「貴重なライバル関係」（treasured　rivalry）であるとする。自分としても「それぞれの実体をゆたかに捉え、ときには境界を越えて相手方にウインクしてみせる」ほどのものでありたいと言う。「この二都を愛するのは重婚のようなものだ。本当にね」というのが序説の結びである。

そうした立場を示したうえで著者は、それぞれのお宝を街の空間のなかに探し求めていく。エディンバラの部は５つの章――ゾーン――に分かれ、最初の二つの章は街の中心に立つ城から東端のホーリルード宮に降る目抜きの大通りロイヤルマイル周辺をとりあげる。「説話の直線」linear narratives　と著者の呼ぶこの１マイルの通りと露地群から成る旧市街はまさに「物語」に満ちている。

ただその物語、通常の案内書が定番的主役とするメアリ・スチュアートやジョン・ノックスにはほとんど眼をくれず、この街が生んだ「三人のロ

バート」――詩人のバーンズ、ファーガスン、そしてスティーブンスン――の語りを道しるべとして、『ジーキルとハイド』のモデルとなった名士ブロディや解剖用死体製造人バークとヘアといった、ほとんど都市伝説の域に入った事件を紹介する。学術の街にふさわしく学者たちも活躍する。とりわけ都市社会学者パトリック・ゲッデスは街の一角を思想の実験所としていた。

第３章はプリンシーズ・ストリート・ガーデンズに始まる新市街歩きである。国立美術館はグラスゴウのバレルコレクションに比べて実業家からの寄贈が乏しく、めぼしい作品は大貴族からのローンから成り立っていた。この都の貧乏話の一つである。肖像画美術館については、人材の宝庫であるこの国の顕彰碑としての政治的意義、つまり文化王国への誇りが却って政治的な独立運動への安全弁の役割を果たしたと見ている。

新市街のプラン自体が政治的な意味をつよく帯びた性格のものであった。設計者ジェイムズ・クレイグのプランはもともとユニオン・ジャックを象ったパターンであり、中心軸の西端シャーロット広場の設計者でスコットランドを代表する建築家ロバート・アダムも大のイングランドびいきで、のち願いかなってウエストミンスター・アビイに埋葬される。かなり純度の高い専門職階級の街にもなった。こうした性格の明確な街はグラスゴウにはない。

第４章は「北方のアテネ」といわれたエディンバラの異名の由来であるカールトン・ヒルとリース港の界隈である。丘上のアクラポリスを模したナショナル・モニュメントは資金不足で工事中断、「エディンバラの恥辱」とか「栄光あるジャンクヤード」と呼ばれさえした。

「医薬・博物館・血」と題された最後の章は、大学、博物館、劇場、そして物騒な事件にもめぐまれた旧市街の南側の地域巡りに割かれる。国際フェスティバル、とくにフリンジの舞台でもある、もっともエディンバラらしい場所である。

「グラスゴウは心の大きい bighearted 都市にふさわしく、いくつもの都心 city hearts がある」というのがグラスゴウの部の書き出しだ。大聖堂を中心とする中世以来の地区のグラスゴウ・クロス、ルネッサンスの都心で

クライド河に近いグラスゴウ・グリーン、18 世紀以来現在に至るジョージ広場である。いずれも歴史的にいわれのある、物語の詰め込まれたスポットで、第６章ではそれを巡り歩く。タバコ王の散歩の場だったり、デモの中心だったり、処刑の場であったりした。

「貧困と富」と名付けられた第 7 章ではクライド河の対岸に広がる場末の街ゴーバルズと、中心部の商業地区が描かれ、前章がいわば点を掘り下げたのに対して、面をカバーする。「帝国二つ目の都市」と皮肉をこめて呼ばれるゴーバルズは移民が多く、大衆文学の舞台になる、われわれには未知の世界で興味深い。

「街頭生活、傑作、アパート、本」（第 8 章）は、中心街を散策しているうちに出会った、グラスゴウを語る上で逸することのできない事象を考察する。「傑作」というのはティールームや美術学校など街に融け込んだレニー・マッキントッシュの建築を指す。アパート tenement とはスコットランド、とくにグラスゴウに特徴的な住居方式である賃貸アパートのことで、グラスゴウでは下層の人々だけでなく、富裕な商人たちの居宅もそうであり、「テネメント・シティ」の異名が生まれた。グラスゴウ商人のまっとうな一面を示唆する。

「芸術、学問、砒素、建築」の章で語られるのは、大学、博物館を中心とする文化ゾーン巡りである。国際音楽フェスティバルはエディンバラで開かれるが、3 つのオーケストラも、オペラも、劇場もすべてグラスゴウを本拠とするという、ほとんどの人にとって意外な事実から話は始まり、フットボールの観客より博物館訪問者の方が多いとつづく。こうした、思いのほかの文化の厚みを形づくったのは、やや図式化すれば、賃貸アパートに住みながら気前よく文化、・芸術に富を注ぎ込んだ商人の気風と力であった。

最終章「水」では、大西洋帝国都市としてグラスゴウを生まれ変わらせた大河クライドが登場する。クライドもまたグラスゴウによってつくられた。世界の５分の１の造船量が集中し、「赤いクライドサイド」として知られた急進的労働運動のメッカとなった。いまは河は観光用になり、歴史を語るリバーサイド・ミュージアムが人を集めている。

簡単に読後感を述べておきたい。

本書は街歩きのガイドブックとしても使えるのがうれしい。相当ハイブラウで上級向き、おまけにハンディでもないが、地誌的構成をとっているので実際にも十分役立つだろう。もちろん歴史紀行エッセイとしても出色、都市論としても高度の知見を含む。高踏的といっても生臭い人間的関心も横溢していて、ほとんどどの章を開いても、犯罪や事件が顔を出す。私は自分の文芸、ことに頻出する詩への知識不足にもどかしさを覚えながら、舌舐めずりする気分でこの密度の高い本に没入し堪能した。

このように文芸色の濃い「二都物語」が可能だったのは、両都市の間には見かけ上の差異と同様に共通性も大きいからだ。どちらも学術・出版・印刷・建築や美術といった文化面のつよさを共有し、その背景には啓蒙の偉大な時代をともにした歴史がある。

ただ、本書が主題とした両都の「ライバル関係」rivalry とは、共通した面での競い合いであるとともに、やはり異質であることを前提としたうえで相手を凌駕しようという意識に立つものではなかったか。だからこそ「貴重」なのではなかったか。この両者の区別は重要である。著者は「重婚」といったが、二都の像は細部にわたって描き分けられていても、それぞれの街の人びとの思いや相互の関係についても、もっと語られてよかったのではなかったか。

また、差異があれば、競争だけでなく補完（役割分担）の側面が出てくるはずで、そうした視角からの考察もほしかった。文学的考察はむろん貴重だとしても、著者があえて排除したと断っている「フットボール、食物、民謡」といった下世話な、庶民の共通言語の世界に踏み込まないで、ライバル意識が論じえるものであろうか。ブリア・サヴァランではないが、「そこで何が食べられているかを語ってもらえれば、そこがどこであるかを当ててみせる」ということではないだろうか。